



物之種を  
用  
於  
心  
取

地

15  
1435  
2





虫女何ぞかあまのり小筆きくせおとるひくひの讀きどと思ひ其側ふひるくひと  
又出て再度思ふに二ツとを若何やむ事りやと又傍おびひくひの書損の外  
くひも座座ひくひの脇のひくひが本のひくひの小座座ひくひと書きりこむ  
此話をりて廿日ひくひを多く出さると思へへ今も童の習ふ廿日りの文やわ  
つれども通用の文は稀なり諺もやうく絶るるべし

西山十百韻 寛文年間宗因独吟

壯老の胸より空の雲晴て  
や吉野の花もひるく

莊老学者の見識ぞ芳野の花も出さるり次第とらひをきある巻

類柑子 其角文集 享保四年刻

前句略  
ふしや竹中 椒皮南盛

用捨箱中一

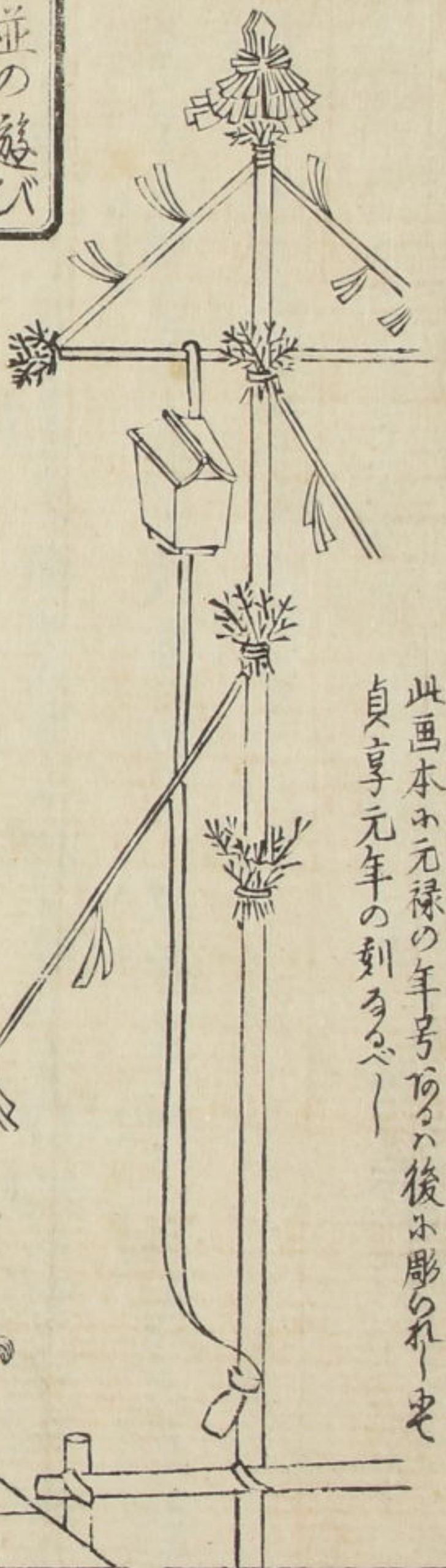
享保の頃の書解今小同此句も竹串へりきまり小卒皮を費する紙のひりきり

二 高燈籠

昔々物語 新見 昔昔小 昔の 死去 其年より七月高燈籠と云物と云る七  
回忌もたつるもゆり立やうの六月晦日長さ五六間の杉丸を上ふ之角のりうと  
結杉の垂糸を包四手をきりて付燈籠の辻番の行燈の形小ちひさく作上ひき  
下まがせ屋根も板せりり云間と臺所の間の廣と小建七月朔日より  
晦日まで毎夜着六ツより明六ツまでと一宗小見えむ他宗もと云く  
如以台衣小なるあり」とゆり是享保十八年小記されしれバ既小當時在家の  
高燈籠の絶るる明るるどらつの頃も何ぞか知らず考へ合まべき草紙も  
未見。師宜が画本小圖あり左小摸と

俳諧世男 杉垂糸とつ又六がぬら高燈籠 似春  
。在家の高燈籠と云証ありしがなれど「杉の葉を包」とあるふ合ま

画本月並の遊び



此画本元禄の年号ありの後小彫り也  
貞享元年の刻あり

頭書云 前文略

玉奈子とてさまぐの珍物とてその  
精霊とてさうまら光若こり火城  
かけ佛名をさるるかむむり  
辺き頃見しるひ佛火  
三年のうちを燈籠と  
こりなれど  
たうふうあま  
見る人の目乃  
うえ火うあ

用捨箱中二

今も死亡者ある家にて七月軒燈籠をかるハ此余波中て高燈籠も二年不限  
凡俗あり一故七回忌をたつるも何と甘く物語ありとこられ一ある燈  
二角ふらうくと結四多をまりて付るると徳花人の記さる一此画よく合  
吉原玉屋山三郎が家にて新精霊中かえとて毎年高燈籠を出す事今小絶む在家不  
は事あるハ彼家のとるんと三亭より辺年の確子あてよとて人故高燈籠とらえがてこそ

延宝七年刻

富士石

享保十九年刻

金堂録

郭公面影かへ高燈籠 調杓  
吉原の灯をさけさむる燈籠 咫尺

延宝の夕一人のふあかけ一在家の燈籠より享保の吟ハ山谷橋場より寺院  
の燈籠より同高燈籠の夕も時代ふらて見されハ句意の解がさき事あるべ

三 禿の菖蒲打

端午の日の印地打一変一てらんあ切とるり正保慶安の頃ハ此日専童のいご

何れその事昔々物語ふなり。又其の心切止て昔蒲打とるれ也 **中古風俗志**

明和元年 老人筆記 小「享保の頃まの所の廣小路へ童集りの昔蒲打で大なるふさきこ打

の繩をうら久或の長竿等を持出往來の子供へあやぐあくとひて下座をさせ若

下座をせざれば打かりるとして使ひつゝ小調市ると重箱をさせられをなく

遊かへり事ると何ぞが今絶てり」との事あり。さて此昔蒲うち絶ゆる

後も吉原の永九の足踏り彼所の日。江戸町方京町方と立別れ待合の街

小出て打合を見物群集あざりて何やまわて疵をかうぶり永九もあがりしり

遊止りとの事平道 揚屋町 彼地の事を集一雑記ありて予写しとる

さき平道没して今をむる便なり考証備ふべき事ハ二ツ見出し

上京紀 享保十年乙巳 参月並集

端午 扱とてよ 隠糸 禿卷 何や免 左十

用捨箱 中三

又寛延元年吉原細見里の家名記の序に「初午の九郎助の所仕舞。上巳の京  
の次郎右衛門のふのふ。五月五日の禿が昔蒲うち。七月の銀紙をかりふかてきの故  
所を彫抜て牽牛ふ奉り」との事と何れが平道が説の如くるべしあるべし

因云。あく小思ふか敵とあるハ名訓深き客の  
事なり是より十年の後宝曆七年七月細  
見の標題と「紋つゝ」とよびも彼客の故  
をきりて七夕の奉り事のあるが故也其  
序中「扱又夕月七日の夜思ふかてきの定  
故牽牛織女ふ奉り末の沙けんを待宵  
名月」と記して下摸しる画あり今も  
さる事ありや不知



四 紙帳賣 紙子賣

飛鳥川 小日 昔。夏近くるれば紙帳賣。冬ふるればとんと紙傘 といふ物を

商あきひうらが今いまのままるる」上あ巻まの記きを如ごとく享あ保ほ出生しうの老らう人の筆ふで記きるるが元もと文ぶん寛かん保ほの頃ころまでまで此こ商人あきの来きりり多おほく今いまのと見み世よ棚たなの賣うりりと其その家いへもあありりと

富士石 延宝七年刻

雨あめ晴はて声こゑりりやや多おほく紙かみ帳ちやう賣う 宗むね也

向之園 延宝八年刻

夕ゆふ立たややああるるが中ちゆうの紙かみ帳ちやう賣う 立た澤ざい

二本ふたでも江え戸どの集あるる延えん宝ほの頃ころの専せん賣う来きりり証あかととままべべ彼かのととりり紙かみ帳ちやうの紙かみ賣うが持もててりり紙かみ衣い賣うの京きやう師しの俳はい諧わい集しゆ中ちゆうも見みええりり左さ小せう録ろくと

誘心集 寛文十三年刻  
種寛撰

冬ふゆ雜ざい 引ひああぶぶや紅べに糸いとの錦にしん紙かみ衣い賣う 千ち之し

隱叢 延宝五

用捨箱 中四

時ときるる哉や紙かみ衣いの聲こゑ 初はつ時とき雨あめ 重ちゆう政せい

夕紅 元禄十年刻

仙せん臺たいの淨じやう溜りゅう瀾らんの紙かみ子こ賣う 花はな田でん

此こ夕ゆふ紅べにのと富ふ士し石いしと同どう調てう和わ撰せんて江え戸どの集あるる紙かみ衣い賣うの何なに園えんもあありり事こと必かならずず昔むかしのと下した人ひとの紙かみ帳ちやうを鈎かぎ紙かみ衣いをきるる者ものあありり質あつ素そのと是こゝを思おもひひややるる仙せん臺たい淨じやう溜りゅう瀾らんの事こと下したの卷まきの照ていのと見みゆゆへへ

五 金銀を加羅との陰語

昔むかしの俳はい諧わいの狂きやう言げん過か二に佛ぶつの中ちゆう間かんのと釋しやく迦かを鎗やり持もちててるる類るい今いまのと異ことなりり談だん林りんの俳はい諧わい調てうのと後あと世よのと雅みやびなりり

空林風葉 自悦撰  
天和三年刻

笑わらひひ敵たか加か藤ふじととや若わかし夷えい 季き好こう



金銀を伽羅きやらとのひひ語釋ごあやくら小見えこみえをりけきしし万治二年の印本いんぽんを此こ際え語ごいととうう空林くうりん風葉ふうえつの京師きやうしの集あひるられらづづの花街はなまち中なかつよりよりひひささるる所ところ也

**吉原讚朝記** 寛文七年印本 三浦屋内みづらやうちせきませきまの遊女あそびめを評ひきする詞ことば云「ある人の曰いわべ

人を炭すす團だんとのひひ色の黒くろききゆゆありととりり。答こたへて曰いわささゆゆららむむびび君きみふふるるれれびび人ひと伽羅きやらを焼やきききままとのひひ心こころああるるべべ」ととりりのの言ことええ如ごとく伽羅きやらを焼やきつつままりり金銀きんぎんをつつままりり。

又。吉原きやん雀すずめ 寛文七年印本「あるままの中なかつ頃ころふふりり何なになる春はるのつつままりりささややららののト

つつままりり云い「つつれれのの節ふしゆゆもも大おほきき丸まるなり其日そのひひひままりり出でききるるづづつつままりり小袖こそでかかびびららそれそれくくのの分ぶんみみああららびび前まへ方かたかかららるるべべ」又。其角そのかくの作しやく吉原きやん源氏げんじ五十四ごじゅうし君きみ 頼より

四玉よたま葛くずの茶ちや云「此君このきみつつままりり物語ものごとりのの秋あきより冬ふゆふふららつつるる頃ころもも田舎いんがの金かねどどさんさんららぶぶららひひつつままりり味あじよよるるゆゆくく程ほどふふららつつ人ひとららんんぞぞいい小こううららままららぶぶええ浅あさかかららぬぬ心こころざざららぬぬ長ながええそそのの持もち物ものををももたたままささるるべべ」伽羅きやらのの一ひと柱はしらどどか蒲團ふしんのの区まりり

用捨箱 中六

けけづづららるる事ことももななりり源氏げんじああららねねばば小袖こそでららるるのの時ときははこれこれももままららるる心こころががほほるるええどどるるどどのの事ことももななりり 吉原雀 向て曰ふつとのひのあまを答て曰。を鼓持の異名也

六 荷かひひ風呂ふうりよ

延宝八年京師きやうしの記き小辻こつじ風呂ふうりよ云云との事ことありりそれそれどどああららじじくく思おもひひ小水こみづ風呂ふろをを持もちああららままりり事ことありりそれをを荷かひひ水みづ風呂ふろとの事こと **川念佛** 元禄十四年刻一の巻まき云。ひとりひとりの

法師ほうしああららままりり四條しじょう川がは原はらふふ年としひひききくく住すまりり云云の茶ちや「三条さんじょうの下した家やをを間まをかかここひひてて」の

ななららむむどどかかままららるる一ひと器きののかかつつふふ昼ひるののららひひをを残のこしし西にしののままららるるふふをを大津おほつ繪えのの阿あ弥あ陀だ一ひとつつああををかかけけこれこれとと何なにききををぬぬれれがが念ねん佛ぶつののままららるる中なかつ略りやく川がはふふをを流ながれれ枯か木きをを

何なにののああままののたまたまけけととまま。身みむむききななれれがが繩なはをを通とほるる三さん文ぶんのの荷かひひ水みづ風呂ふろ」との事ことありり此こゝ冊子さつしのの他ほかののままにに不ふ見けん也なり 淨福橋本のチヤリ場ふ事あり香板の矢も標題を記すことあり

此茶このちやのの一ひと本ぽん 天和上野かみののの花見はなみのの茶ちや云「あることと見けんららううちち小遺こゝろ任にん何なに方かたへへ行いくくべべらら





事漢中壽陽公主の梅花粧の事。和名菅家の幼き頃祿せぬと  
とて。梅の花苞の色も似るる所を顔あもつくべしけり。とふと續無名抄

延宝八年引れども此沙歌の由所を知らざれば證とらるべしとされど和名

抄「和名經粉。釋名云經粉。和名用途。經赤也。染使赤所以著類也」といふは

古くよりあり粧ひるの論は契沖曰。閉と保と通む類丹乎。此説ふれば閉

途の類は著るより出に名あり。又廢れたるのと近し後院別當の卷「予が弱

年の時享保の頃まで婦人の顔を粧ふ類紅といひて白粉をぬりて後。紅と白

粉を交て爲紅色にしてそれを頬につけて端を散らり如ひされば顔色麗しく

元文の初の頃より貴賤共頬紅を止て白粉をを爲くなり或白粉を

ぬくもあり何故かひきさるぞと人小問され遊女の粧ひを似るるなりといふ」といれ

ば當時の遊女の素顔となつたとあるより此事の絶するべし今乙沙前といふ

用捨箱 中八

とろを画きても假面つらても頬を赤く隈むるは此余風なり

八 涙法師なる法師

人を嘲まのやめて法師といひ又坊。發意ともいふ。九虫といふ通ふ。鄙文虫。まをん

坊の類種々あり梅むるは此俗語よりあり散木奇歌集連歌の部

十月をくり月のあかりなる夜四条の宮ふまありて女房より物語して

あそびに依ふ俄よもしてあふれのまげまばまじしとける

あふ空のるをさぶらうとありふけり 甲斐公

あふれもうやと顔ふかまる 柳亭日附のいへ俊頼卿へ

涙法師の今いふ泣虫。時雨を泪よりほ大空のるき虫ふるなりとのさしありあり

又宗長手記 大永二年の榮の俳諧

前句 般若寺坂乃大と食ふも

附句 心々々せちぢん坊や文珠院

般若の智慧の事るれば文珠。と食ふせちぢん坊の四ッ子附る。下学集小

世智辨 世俗悖惜之義也」とゆればせちぢん坊則今もあそん坊有り悖者

とと食のやうなりあど昔ものいへ故ふか附る事よく知る。又我子を法師と

公是の他小對して卑下の約有り 御隨身三上記 年之記 朔日御廐汚座の事

ひ処目出度顔あつるうへ上意を汚し笑ひ是の小法師廿九日夜守をり小誕

生ひきを名傳出の事事ふひ」とゆるの記者之上某男子をまうけさるよるひ城

公の戯れてのこまひ一事を記しあり 同書小 才法師誕生之後に對兩種二荷

云云 三郎といふ男子ありうへはそれ見えたり故小才法師といふ。又。然の枉言也

我子の事をよる法師といふ梅どるふ。鏝のやう小冷し。鉄史助のやう小瘦し。ある

やうあつぬ女を鏝娘ともいふを 鉄娘の事板子の潤澤もよく艶もよく肉もあつ夏ふ

用捨箱 中九

譬へん公網あつる法師の瘦法師といふ事あるべし先達の説小悴の悴の字有り

子といふ義あり。やせがれの上略るらんと。さればる法師もせがれも同意。瘦法師

やせ發意。瘦坊とも通ふといふべき例あり。今男子のいさるべき坊坊ともいふ是なり。他

よりお坊様といふの当らむを 此類の俗語のとあり。大なる發意を大

男を諷してのいへ一寸法師の反對あり。人影を影法師といふも黒くをうへけ

あるが故なり。物を穿れれ思さまうて余所など見をる者をつんとして居といふ。龍耳

をつん坊といふ是なり。何事をあつても遂ざる者を二日坊主といふのその主の字を添

瘦法師 癖好といふ諷も僧の事ありゆゑ。瘦發意の癖小瘦るといふ癖と好む

を嘲るなり 草稿あり見出し限りを書のせそあきなるが讀人の倦あそんを

おそれ其うち二ッを次の条に記す

九 掃地坊

潔癖けつへきの事を掃地坊さうぢぼうといへり奇麗好きれいな好き不過すぎるを倒たふの嘲あざわらといなり

境海草きょうかいそう 万治三年刻

心かろ花の露つゆや掃地坊さうぢぼう 長治

空林風葉くうりんふうえつ 天和

煤拂すすはら 煤染すすぞめ一衣ひところものちぬ掃地坊さうぢぼう 可不

俳枕はいまくら 寛文撰延宝刻

伯耆園名所 大山 大山や雪道ゆきみち分わかる 帚ほう坊ぼう 一雪

掃地坊さうぢぼうといふ事今いまのそざる歎なげ帚坊ほうぼうも同意どういある處ところ

十 さらめんぼう

節用集せつようしゅう小迷こま

さらめんぼうを振ふるといふ事ことの今いまもいへり梅うめざるふ。さらめんぼうるふ一ひと節用集せつようしゅう小迷こまとあれども狼狽ろうたいの字じと當あらん歎なげ。さらめんぼうるふ一ひと文坊ぶんぼうといふ程ほどのまをりまをりとふ

用捨箱もちがたばこ中十

振ふるの立振たちふるまひるといふ事ことり或あるの坊ぼうを棒ぼうと思おもひ何なにやまりて後のち小添せてといふ歎なげ未考

洗濯物大盥せんたくぶつたいがん 寛文六年刻一雪撰

大和史 夕立ゆふだち小さらめんぼうとある野のるる 松翁しょうおう

浮世の北 元禄九年刻可吟撰

夕立ゆふだちやさらめんぼうとある門かどの麥むぎ 黒太

さらめんぼう。ゆふだちの。麵棒めんぼうあり。様子ようすを麵めんをつらより出いて一ひと廻まわりといふ附會ふくわいの

説寛文前ふとや何なにぞ故ゆゑふとといひ一ひと行脚文集ぎやうきゃくぶんしゅう三千風さんぜんふうの。迷悟まいつくと書かて立

駮まがふ事ことと。又また姥橋おばはし小こあとの路根ろねの残のこでまくるは俄まづかたをうきこれとるるぬ

とさらめんぼう旅籠屋りやうろうやとあり坂木賃さかきちんとありびるといふ事あり

十一 やんちやぼう

今小見いませうみの残のこ物ものるといひいぶるるとやんちやんといふ彼坊かのぼうを添そへてやんちやぼうと云いふなり

江戸廣小路 延宝六年刻不卜撰

二火三火達ケりとのやんちや傍 言水

富士石 延宝七

高粒珠西凡のさひやふりや傍 一益

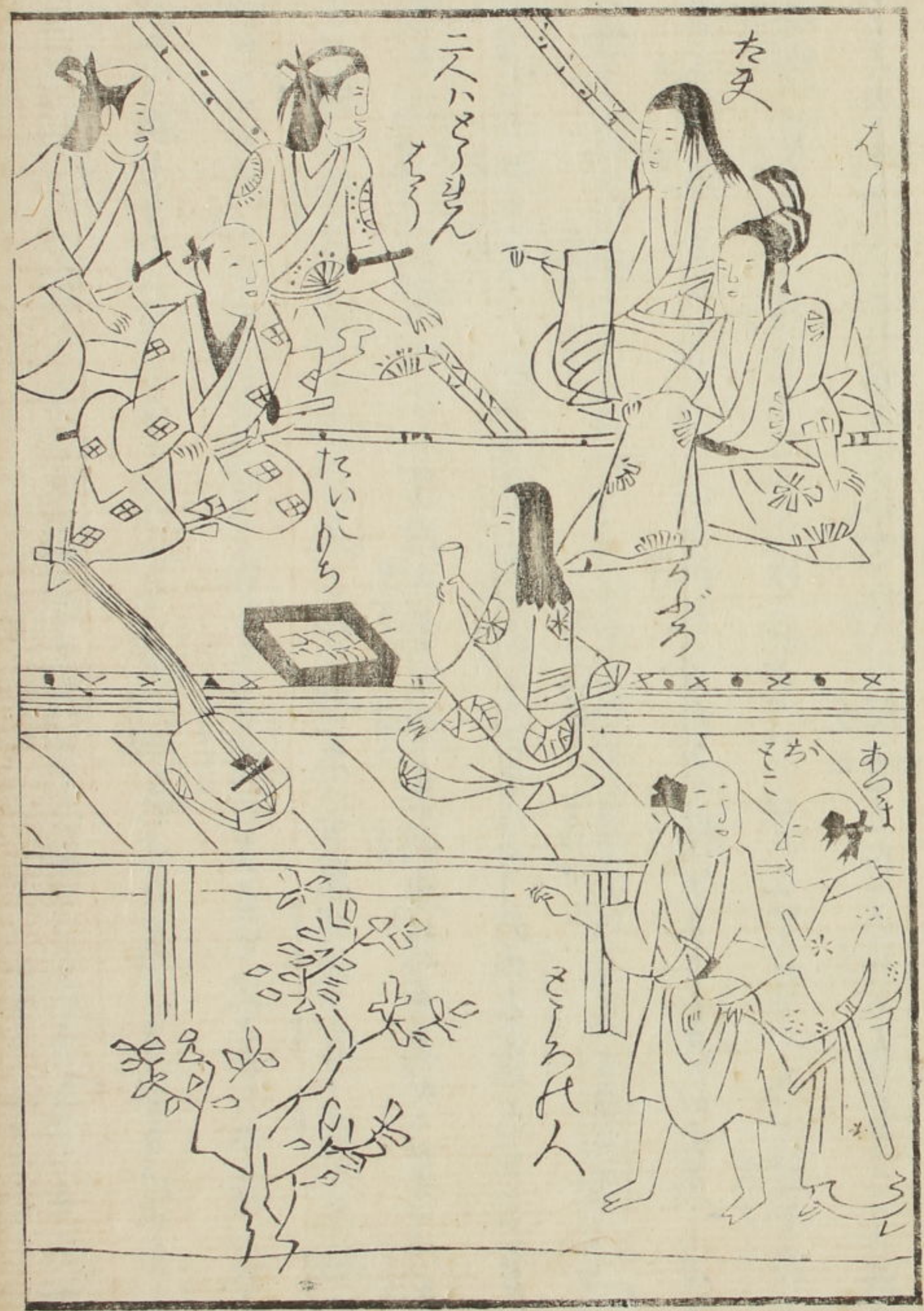
十二 さらん傍

元吉原の傾りの流言ふさらん傍とゆふとあり是は遊女ふ誑され金銀をさら  
る傍とのふ意なり。又さらん傍とのふ是は反て客の方へ金銀をさらん傍と  
とんひの語勢。故ふさらん傍とのふ事下ふをえたり或り。さらん傍或る。さら  
れん傍と云訛音便也。さらん傍とのふは自他の混ト。さらん傍もその原と  
さらん傍と云傍の二つなり。まら古くさらん傍より抄出。原吉原細見記

何の物語 元板寛永十九年 目録ふ「さらん傍の事。たのと持のり」と並出

用捨箱 甲工

昔の草稿と  
京へのかせと  
彫りや此  
草紙の板元  
せんや  
情去情  
とある二條  
通う鳥丸ある  
事色音論  
んえたり  
按て作者と  
色音論と  
同人あるべ



「やうれつ金のあふるほどさらん傍後かろむと桶伏とあれ」との狂おと載て左の圖あり

色音論

寛永九  
年印本

下の巻に「あつた心も吉原の二八なるの女らうの肌あけ白きうき小袖

うへはさきく物ぎきの及びたるこのひらち帯中略これをたまとまじたりは町あ

のあつた人小異名とつらるり何と見ええたる侍の異名をいをたたらんがあれ

見えたる女郎の格子の君とまじけり」とあり此二本の吉原旧地不在一頃此草紙

吉原讚嘲記

寛文七  
年刻

小新町九去濱内夕秀を評する詞に「つも花やうな海

くちあんぎうの如く美人くかざりたてあかきとせんをうのたまもあともり

さらん坊といふべきを誤る青きいひうぎるり。延喜八鼻毛るり。又吉原矢墜

小局で思ひ違ふもさう」とある注に「つねねて横をきうまるをいふさべ。る

程のさらん坊るりも横をきうまるありがうかおけるのとあり」又「七種買役日

も常よりいひまやしくこそあはれもさうの初音もあとの外小春めきて」とある

注に「もさう。さうんさうの事あり。或人曰くひてのさらん坊るりいふさでかくらや

用捨箱 中士

答て曰。女郎の旁へ金銀をさるん坊るり尤」とありあふらふ如く當時をさる自

他の混トる故此語釋あり。るり取の假字初音といふはうれてかく書一なり

吉原大雜書

延宝三  
年刻

八橋さまを油一させばあとお小袖のちう一あまかきつむを

を徳せつたりとつら殿とあおのせぶりの立姿さらん坊が白糸のよきつ

りつれつ結ぶ縁」るどり事あり此なり。續画尽。笑委集。松の葉。くさぐさの草紙。おんえ

これと同事るれが皆略く。又姥櫻。粹彫年号。小「やりのまさら道具持。ふつこの馬

のをと物。を鼓する鳴物。さうん坊さらん坊との唐僧の名とあらう」とあるを花

街の事を知らざる者を嘲る詞也。取。さらん坊の二ツを並せり。又日本莊子。元禄十

小廿歳の夏より色小浮名と取まん坊とるり山谷のまのあふ所を照らす

此草紙のまの字をト書き作者都の錦文流とある者故自他を謬

らむさく狂歌小詠るるト養集のやうな未見能諧の句もさうくるるを

續山の井

寛文七年刻季吟撰

児搦 我を心城さられんが 越前 古玄

京三吟

延宝六年刻

を夫の姿陽を失 けを 仙庵  
さるん坊吊ひさ人とりひ捨て 信徳

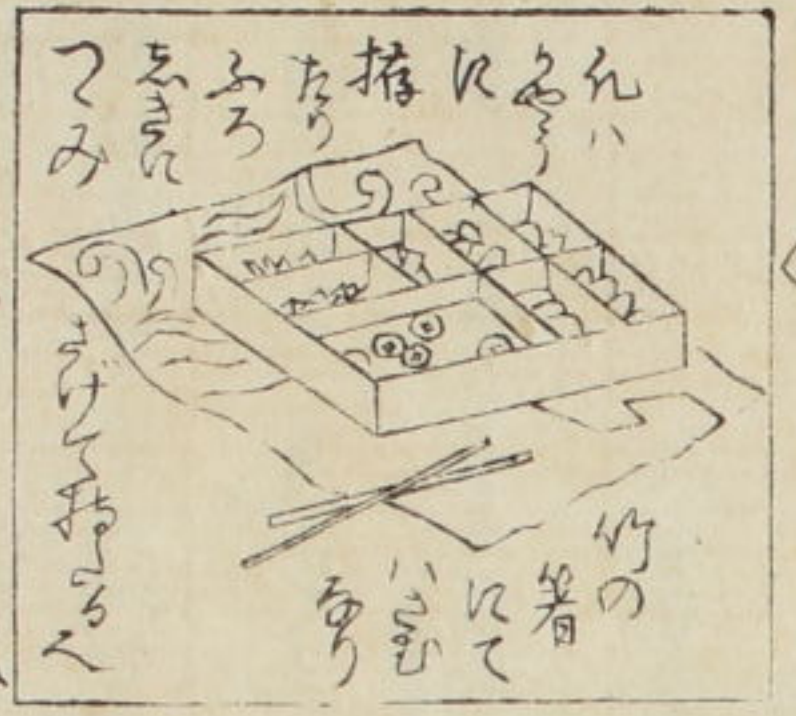
二本とも撰者の京より古玄の越前よりされ此流言寛文の頃より何處でも  
すつてゝゝるべし。又「大冬舞」の小歌小「東叡山の小搦坊。金龍山のさるん坊」  
との事あり上野の花の名所なり。搦の實をさるん坊とのふより小搦坊と人名の  
さるん坊にて。金龍山の花街の通ひ路なる故さるん坊と對あつるやありん

十三 七色賣

昔い庚申と信むる者よとふ多かり故や庚申の日より七色菓子賣賣來

用捨箱 中十三

是り當時の人は是を七色賣といひ「庚申秘録」にも云々する如く七種の供物とそ  
ゆつて祭つ法あるより。それを表しし物なりと云。世説愚案問答 寛文七年刻 小曰「昔  
る庚申の七色。甲子の七色とて名目一錢にて七色の供物を賣り其調へやうの  
干菓子砂糖大豆せんべいの様の物を調ふ。さて供物の箱（やう）へ或は高砂麻せんべい  
おれの けうろぬお形をくくし又小き箱又文匣など小仕切をて供物を入り  
箱の仕様のやうな記と圖の如し。外紙袋紙布の錢をのれ持  
たるもあり。又箱の中仕切りを大きめて錢を入るもあり。是  
も後紙よ包と仕切りの箱小入る。元禄年中までいささく小  
賣はゆりし紙おはむやうふなり七後程るる賣也」以上愚  
案問答  
あふふ如く今の店にて賣のころり 備條をさるん坊 賣さる事あり 外紙袋紙布の錢をのれ持  
の供物るがや元禄前より大黒おも備（今の童の天満宮お供する物とのと思ふ



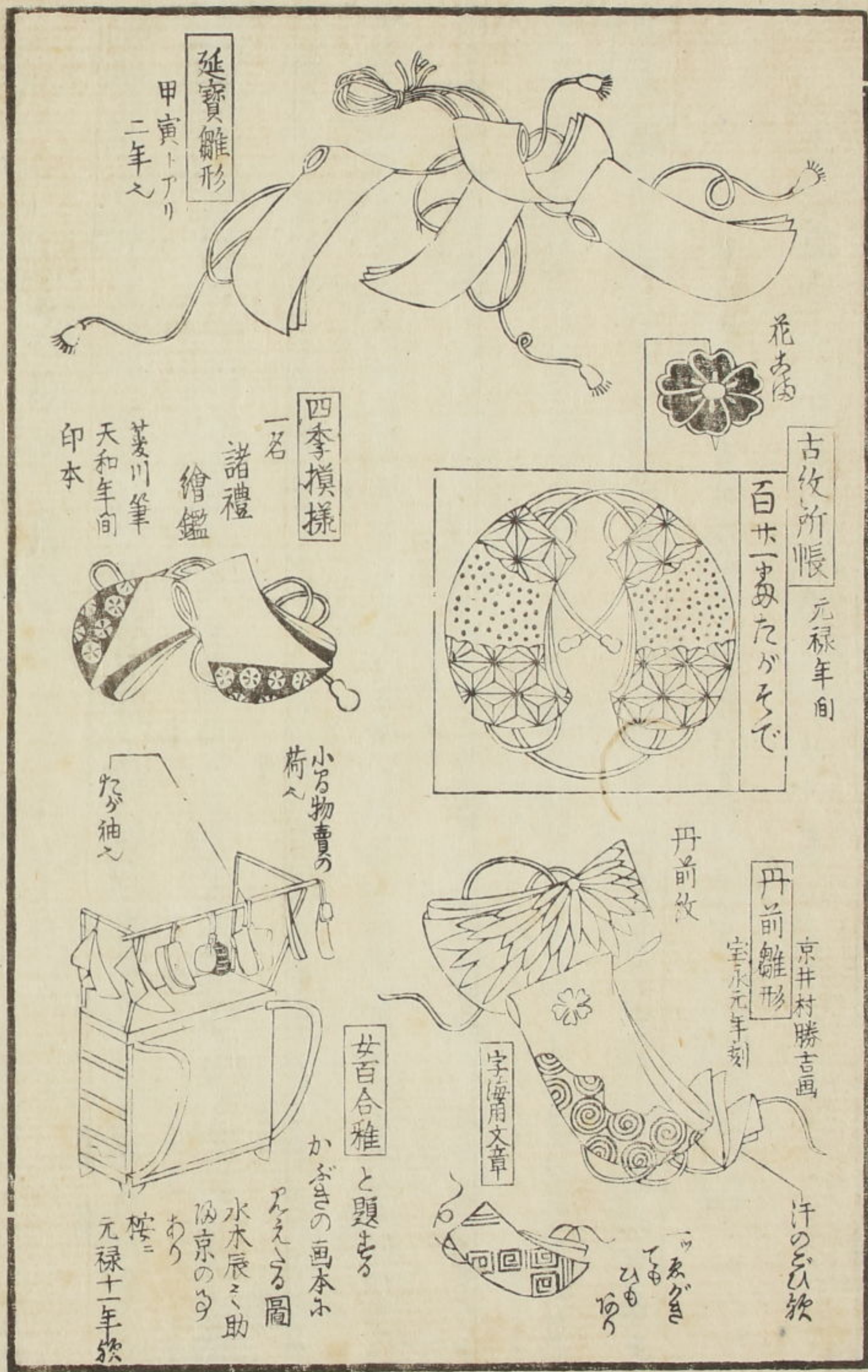








代袋とありとのひりね云々  
 女重宝記 元禄五 白袋 誰袖  
 年印本 白玉香包」とあり



是等の圖をりくあり。又香のかどと一名白濁物語 元禄八年刻「梅花黒方などのなき物。麝射香あやかし

龍腦の誰袖云々」又宝の市」と題する樂山點の前句附。桂木とのみ者の句ふ

「梅が香ふ誰袖捨る霜の朝」といふ元禄十 六年吟あり句ひ袋する事より、時の足ふとくを

思ふよ今婦女子の細工物といふ大方香裏裏るべし。まづ、貝張の香貝欵「年中定

例記室町家 之旧記 正月十一日の象「御所くへの所をあげり。あき板。あきのこと。白貝已下

様へも同蒸」とあり。羽子板。羽根。貝張との程の事とす。白貝の事は是

より古くもありん。貝張との物近き草紙の中あり見えむ

向之圖 延宝八

ひ干 張子貝はりこいのや干ひその浦 調南 錦の浦

此の貝張といひるるべし。又花形の獨樂も原の香裏裏を花袋といひ物ありあり

と。花袋の白の万治前後の儼書えんあよありくを証とす。証とすを二句録ふくと



袋とりの物の類ありけりむや浮世代衣とい別物あるべし

十五 土手筋 加賀筋

昔に谷通ひする者の歌ひし去る筋といふ今傳たる踊で歌吉原雀ふ。それ  
編み立もそこあけ云云といふ糸の筋あり。此吉原雀の歌初て作り出さる  
當時の張の言向多原富公羽の唱弁を見られ。わの昔流行せし去る筋こそ  
よかりめとををさされしるをとを 梅と翁の室永 六年の生 その翁の門人の門人小林某文化

丙寅の二月末で 予が合壁住の去る筋を彌歌紙あふり唱歌いしる

てん焼くも一歌の松の葉この巻小んえさるに谷飯りといふささぎ歌

小大同小異なるがゆふ不載其二歌

○前日の面白かりしが今日ほどや物淋し。いづれを呼ぶやらう。あまをびん  
残招くう狭。びんともうき物があつ。何が。一口か加子小紅のほのこをめて

用捨箱 中九

ま。何所へ。船宿へかひきこ可後智恵をま分別へるべく。採つかうましく  
あんぢやうきうさるのよサ。さかく意路の氣がゆめり

前夜色里でもたる小歌とらふ。あまをびんを覚えん中の中ころわ  
忘れさアこそあふべなれと書て世更々それ入出口かかてま義理も諸  
力も此通りめんぐくるのいかんぢやうきうさるのよサ。以下系同

野俗る唱歌るが古雅なり。此ころまあまをびんといふ事不解歌人小向も  
不知。近曾と風あひふ。こころの綿摘り。写本 吉原つれく草 宝永一傾城より

茶屋のいおこり。茶屋者より。綿摘いおこり。綿つとより。比丘尼いおこり。とらふ  
事ゆり。あまをびん。儒子賢。あて比丘尼の事るべし。儒子の頭巾を髪小替ると  
いふ意あて隣りなれとびんうらうこもる。は二歌ある草紙あて未見

雑話聞見録 文化年間編 作者不知写本

元禄の頃とてつぎぬしといふ歌

○中へ色里でもゆる小節をありや後さたかぢえらんご中の小節を忘  
まていさそとゆるべいこそ書てりりふこと。ちまへとんと落い義理も諸分  
も此通り面目あり。一口茄子の喰さふ紅のつこと落いごこへ船宿へ  
かいてまて。でぐぶさうを智恵とせ分別せのゆのやんこ」

とふ歌と載りり 元禄二年刻 千春撰

武藏曲 天和二年刻 千春撰

遣世の余所小妻子とのぞき見て 芭蕉

つぎぬし 耳小残ふ吉原 峽水

又吉原つぐ草 貞享年間作 元禄二年刻 小「かぢ。つぎぬしの小歌を色糸は弾う」と

公事るとゆれば吉原までゆく 流行し小歌多事へ明るれど精細未考又

用捨箱 中三

洞房語園 小載る。かゝるに谷の草深たれど。といふ去る節の歌の 元禄二年刻 吟  
の二強り合ども名ひとてさましく小歌ひりの歌

○あふ引ー つぎ草 小。つぎ節と並べていひ。か節誰とも知る其角の撰

虚栗集 天和三年

に谷吟行 詩 沢加賀小やとら蛙の那 楓 貞

とゆるより吉原のそむてのなまり小歌と思ふ人もゆるめれど是もつぐあてを

歌ひし尋るる 昔々物語 小「六七十年前 草保十八年より七十年前 寛文四年也」の昔。徐宜町の狂言

座中村勘三郎座中。多門在たまの。野良小。出来源小ぎらじ。花井也三郎。

玉村吉弥。玉川千々丞。山川内記。玉川主膳 是等かられるきと又男。拍子まの

声よき者るる。是は守寄合を加賀前といふ歌をうへい出ま 中略 その引つぎふ。梅

つぎ。妻 貴船。るるの長歌も此者ども作り出さる 梅が妻の事下巻小あり印本小此

説小よれば加賀節にかきき者の歌ひ出しるる **國町の沙汰** 延宝二小。隅田川舟

何とこの事と云ふ茶小「此頃きこえ何の猶都と云座頭と云のせ近江がうち」

紫檀の二味線金の鷄目あつるさう小忍ませ。芦原の舟乃さきまをがちな海

音トさふ銀のかせ掛。誰もかると氣色もあう。撥音けごうか不さう小弾るじ。

其空蟬の尻を欠て於人かつのなつりやとさう小加賀節はさうも清川の

流きの水を酌一かと何やまう」と何ぞそ注小「かづーあさうらうとりへど

今小廢らむかこ一小大事」ととえさう延宝二年小事ふさうとあるあて寛文

中の小歌るる或知るべし。又 **天和笑委集** 二年三 堀町の事と云茶小「法師沙門

此道小あつてさうらへバ也智学智を失ひ中略 諸經ぶさるの音声をひきか

らうさ。加賀ぶし。さながらやうのさうもるき。まやり小歌さうと云 さながら節の唱

又近く **京大坂茶屋雀** 元禄小。おやまの歌小小寄 何り其うち小「いせ節

**用捨箱** 中北一

加賀節。せんさ節。ほこのえ節 云」と何と云茶小の如くつぐめても秋ひ

あり。又 **西鶴と云産** 元禄六年小「連節のかを加賀」との事何り元禄の頃の節も

一とあさるるべし。備加賀節の唱歌 **松の葉** **續松の葉** 小んえさうとも用

るれば録せむ。又 **紫一本** **姥様** **麻子心** **洞房語園** 等も加賀節の事あり

**十六 質屋の看板**

昔の質屋小看板何り。將某の駒の形ある板を紐を為。その板のう小質札の

及古と。紙の塵をさきさきの如く束さる物なり。其板をかる事止て後の彼塵をさき

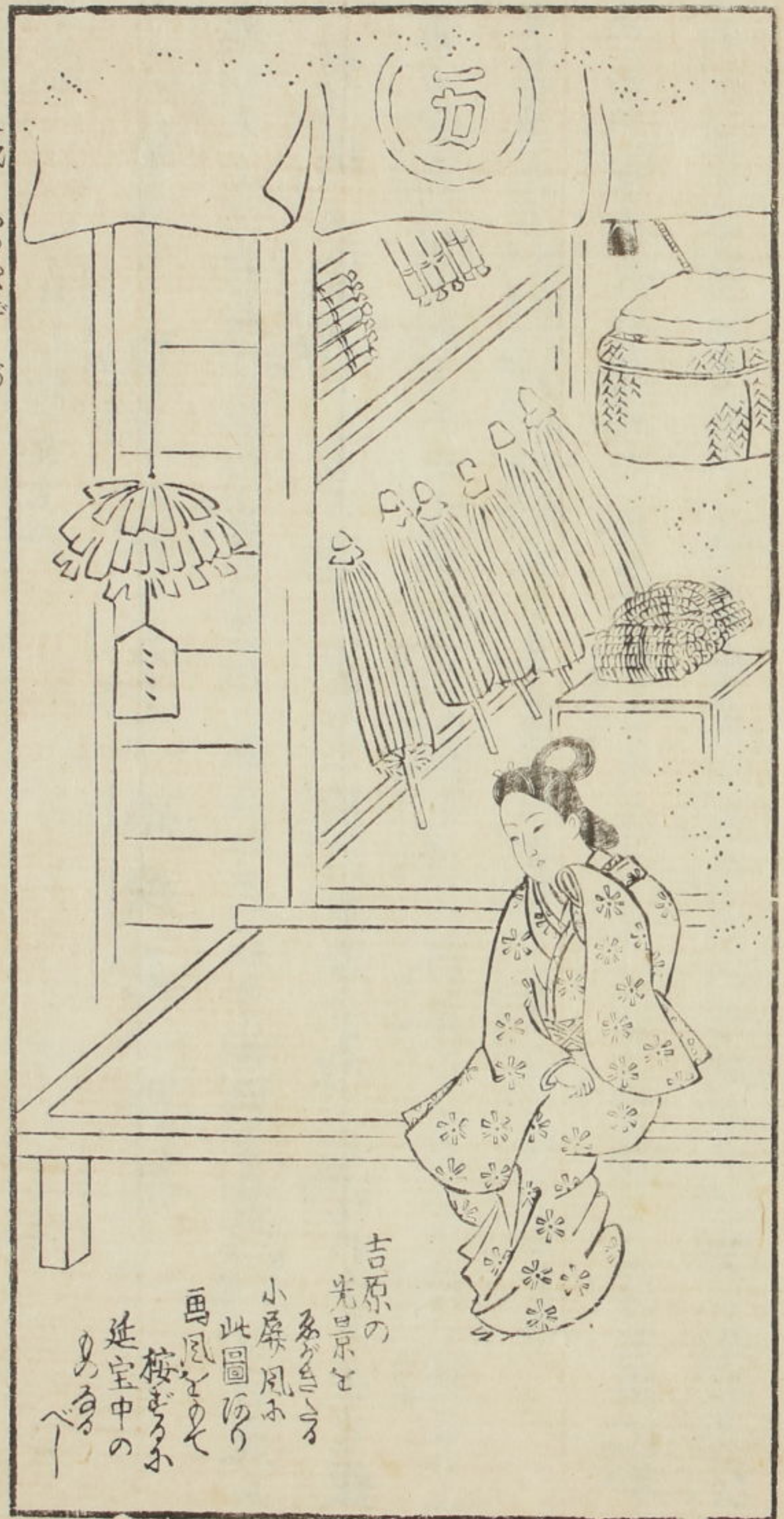
めさる物とのさるなり。是の京師あ今も何りとゆり。ま故やらん近きかる草紙

の画の中をりく見れど板札をぬきたる稀なり。或人の日昔の謎語のやうある

看板あやぐ何り。將某の駒の形あり。金ある。金銀小かるといふ意らん歎と。

予二十年前友人の家へ傳來の看板を写しあきさう縮圖一七左小出さ

京都板の色柄小圖のを見れば此看板江戸のりゝゝあるを  
 下つり軒へひきまづ物なる故出入人小窓をこせ下の用心欽質札の反古なる  
 あまさままて胡粉を白く隈り  
 他國あつても質屋の看板種々あり圖と  
 得方もあると考へ足さる由あるふ不載



吉原の光景  
 小原風小  
 此圖の  
 画風として  
 梅室中の  
 あり

享保年間馬巻  
 ○該畫  
 かちり附の  
 地は白小ひ圖あり

「ニク」

志ちや

「シラシ」

享保年間印本  
 ○道外百人一首  
 近藤清春画

焼印  
 五

享保三年印本  
 ○野傾咲分色  
 四の巻小  
 此圖あり

七寸六分 縦  
 中八寸二分

質

東 車 塚

横六寸六分 板厚一寸

上野町まじり目

質

作勢を  
 あり糸

用拾箱 中廿二



〔十七〕 鎮銚屋の金魚

江戸康子貞享四年金魚屋。下谷池之端。あちち屋重た妻の」と記し又同所小地張きせる屋。あちち屋。市野を妻の」とあれが重た妻のも原の烟管屋をわびる事

向之圖 延宝八

納涼 影涼—金魚の光り鎮銚屋 調桝

延宝中より名高き金魚商人あり事此句を知らる西鶴元禄六年卯木産

上野の様云々黒門より池の端をのむあちち法渝屋市を妻の」と記されるうき金魚銀

魚を賣者あり庭小生舟七八十も並べてあちち洒水清く浮藻とされるうき潜て泳る」と

この事あり西雀の雜波人多るが今いさる商人の住難せんじき敏茶花の地とあり

再云此至産の目録小「金魚が狂言もあや」とこの事あり是より前元禄紀年

小刊行せし「風流盛衰記」小「又の日ハ金魚と生舟小つわ狂言とをせける是もつひ

用捨箱 中五

水ふるしく」とこの事又あり。按る小金魚の狂言と彼魚水中あちち宛轉一踊り狂うきる事あり。今業を植る者狂ひ笑してあちち花形のまぶるとうき菟があらるとり類うきあちちらん此事發句あり古く見えたり左抄出

新續大筑波集 万治三年季吟撰 寛文七年刻

とどまるや狂言金魚秋乃水 松浦

〔十八〕 物城賞て伽羅といふ

世目伽羅を愛する事今あちち過り其故あちち小香るあちち物と賞るあちちも伽羅といふ事最あちちあやあちち予あちち幼あちちの老人あり。今の俗。世事あちちといふ事と。伽羅をいふ。世事。者あちちと。伽羅者といふのあり。思ふ伽羅あちち小た清つ。伽羅あちち休あちち慶るあちちといふ世目あちちの間もあちち自あちち称あちちありあちちいあちちむあちちさるあちち意あちちありあちち初あちち他あちちよりあちち名あちちづけあちちるあちちべあちち。備。伽羅あちちといふあちちいあちちむあちちるあちち。正保年間 著写本 小「是もめりていさ御代もと上をいさ下をいさ



十九 師走坊主

近松門左衛門の作の夕暮の淨溜橋の傾棟阿波の留戸と題き吉田屋の段。  
伊左衛門の詞紙衣さきりぞあらく引ケを破れる柵めを跡ふまふと坊主  
あふと浪人」とあり姿やつくつく便りあげある者どさうて師走坊主あふま  
浪へとり諺の昔あり一故ふかくつて書きあるあり盆僧の物のりふ事  
あふまふと歳暮あふまふ事由るまふと

落花集 寛文十一年刻以仙撰

俳名 佛名を唱ふの師走坊主うか 勝正

此諺の實の僧の事あふまふ託しる。今日坊主をとりとも違ひ。今の淨溜  
橋本より師走坊主との事略てあふ

用捨箱中之巻 早



用捨箱中巻

